

天気のことわざはどこまで本当？

今日は、6月6日。某、絵描き歌の通り、「雨ざあざあ降ってきて」となっていました。三角定規にひびがいかないように注意してください。

さて、科学が進んだ現在、気象衛星によりかなり正確に天気を予想できるようになりました。しかし、昔からの言い伝えも捨てたものではありません。昔の人の知恵や観察にもすばらしいものがたくさんあります。では、その正確さはいかほどでしょうか。

初めに「お日様やお月様にかさがかかると雨になる。」という有名なことわざについて考えてみましょう。科学的にこの現象を説明すると、

空の高いところにある小さい氷の結晶に日光や月の光が当たる。

その氷の結晶がプリズムの役目をして、かさに見える。

その氷の結晶があるのは巻層雲（地上から10000mくらいの所の雲）の中。

巻層雲は低気圧の前面や側面に現れる雲。

だから、かさが見えると低気圧が近づいている。

お日様やお月様にかさがかかると雨になる。

となります。なんと、ことわざが科学的に正しく説明されてしまいました。すごい！

では、「カエルが鳴くと雨」、これはどうでしょう。ここでいうカエルはアマガエルです。名前の通り「雨蛙」なのですが、このカエルが鳴くと本当に雨が降るのでしょうか。この季節の夜の合唱は、メスへのラブコールなのでぜんぜん関係ありません。ここでいうのは、「雨鳴き」とか「レインコール」と呼ばれるものです。

愛知教育大で調べた所によると、

カエルが鳴かなかった時、翌日に雨が降った割合は11%。

逆によく鳴いた時、翌日に雨が降った割合は36%

だそうです。なんとも微妙な数字です。これは「夏休みの自由研究」にもってこいの素材かも。やってみませんか。

最後に「トンビが高く上がると晴れ」はどうでしょう。これは、晴れたから高く舞い上がるので、原因と結果が逆転している例ですね。このようなことわざも結構あります。

天気に関することわざはたくさんあります。是非、調べてみてください。そして、子どもたちに伝承してほしいと思います。そして、昔の人の経験や観察のすばらしさに触れてほしいと思います。家庭でも科学と昔の知恵をじょうずにミックスして、楽しく天気予報をしてみませんか。みなさんも自己流の天気予報をお持ちでしょう。鳥海山がよく見えると翌日は雨……とか、腰が病めると雨とか……。（私が参加するとなぜか雨、という人がいたりいなかったり……）